

# パリ国立図書館の装飾芸術の主題に関する考察：大閲覧室のメダイヨンに見られる人文学の叡智

## A Consideration on the theme of decorative arts in the National Library of Paris: wisdom of the humanities expressed on *médallions* in the Great Reading Room

白鳥 洋子  
SHIRATORI Yoko

キーワード：パリ国立図書館、アンリ・ラブルースト、19世紀フランスの建築、装飾芸術

Keywords：National Library of Paris, Henri Labrouste, French architecture in the 19th century, decorative arts

In the National Library of Paris, designed by Henri Labroust in the 19<sup>th</sup> century, a series of *médallions* in the upper part of pillars in the Great Reading Room is one of the rare representational decorative artworks. In this article, I surveyed the profile of the persons engraved on these *médallions*, and through the analysis of their characteristics, clarified his conception of the National Library.

### 1. はじめに

建築家アンリ・ラブルースト（Pierre-François-Henri Labrouste, 1801-1875）の設計によるパリ国立図書館（Bibliothèque nationale, 1854-1875）<sup>1</sup>は2007年から大規模な改修計画が行われ、2017年に第一期工事が終了した。フランス国立図書館の1つのエリア、リシュリユー館（site Richelieu）として新たに開館し<sup>2</sup>、大閲覧室は彼の名前が与えられ、「ラブルーストの間（Salle de Labrouste）」となり、その評価はますます高まっている。大閲覧室「ラブルーストの間」と中央書庫室は芸術を専門とする国立芸術史学院（INHA, Institut National d'Histoire de l'Art）図書館となった。国立図書館時代では入館は研究目的に限られ、第3課程（博士課程に相当）以上の研究者とする資格審査があり、資料閲覧は有料であった。館内の写真撮影は厳しく禁止され、修復工事期間も入館禁止であり、パリ国立図書館に関して現地調査を伴う研究は長年の間、事実上不可能であった。

ラブルーストの作品ではパリ国立図書館においても、もう1つの代表作サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館（Bibliothèque Sainte-Geneviève, 1838-1850）においても室内装飾は繊細で華麗な意匠であり、それらは意匠の効果と実質的な利点を兼ね

備えていることが多い。繊細な鉄構造と堅固な石造の構造躯体、壁一面に並んだ書籍と書架がそのまま室内に現れ、知性的で美しい意匠は今も多くの人々の心を惹きつけている。概して構造と建造、機能上の必要性に呼応した要素であり、具象的な装飾の要素は少ないのである<sup>3</sup>。長年、撮影禁止であったこともあり、パリ国立図書館の装飾芸術に関する研究は少なく、詳細な研究はほとんどなされていない<sup>4</sup>。具象的な装飾芸術としては両図書館の壁面に描かれた自然の樹木の大きな風景画が挙げられ、その他には今回取り上げるメダイヨン（*médallion*）が挙げられる。大閲覧室の一連のメダイヨンは彼にしては珍しい具象的な装飾芸術として注目される。主題の構想と図案の制作、彫刻家への依頼や経費を勘案すると重要性があると判断され、彼の同図書館における芸術表現の意図を有していると予測される。また、彼自身も「判読可能な建築」を目指し、見る人が見ればその意図を理解できるような構成を試みている<sup>5</sup>。本稿では、2017年と2018年の現地調査で得られた資料と後に記した参考文献を基に同図書館大閲覧室の一連のメダイヨンの分析と考察を行い、さらにパリ国立図書館における芸術表現の主題を明らかにし、論考を深めることを目的とする。



図1：パリ国立図書館大閲覧室、現ラブルーストの間

### 2. メダイヨンの概要

メダイヨンとは大型メダルを意味し、正円や楕円、卵型の枠組みの中に浮き彫りが施された建築装飾の一つである<sup>6</sup>。石材のものは主に建築の外壁で用いられ、室内で用いられる場合は絵画作品であることが多い。メダイヨンの源流は古代ローマの硬貨（*monnaie*）であり、古代ローマの硬貨では表面に統治者である皇帝の横顔が、裏面にはそれに関連する図像が施されていることが多い。それらはその時代を知る考古学的資料でもあり、また、その鑄造技術からその時代の文明の高さを測る指針にもなっている。古代の硬貨はパリ国立図書館にも多数所蔵されている。メダイヨンの縁取りはカルトゥーシュ（*cartouche*）と呼ばれ、その起源は古代エジプトのヒエログリフに遡る。ヒエログリフではファラオの名前を楕円で囲んでおり、その楕円の囲みをカルトゥーシュという<sup>7</sup>。古代ローマ建築を代表するコンスタンティヌスの凱旋門（*Arcus Constantini*, 315）ではファサードにメダイヨンが用いられており、メダイヨンの模範的な用法である。カルトゥーシュの中の浮き彫りはしばしばその建築と関わりのある逸話や歴史、偉人たちや神話性がモ

チーフとなっている。古代ローマのメダイオンはイタリア・ルネサンス期の建築に復活し、フィリッポ・ブルネレスキ (Filippo Brunelleschi, 1377-1446) による捨子養育園 (Ospedale degli Innocenti, 1419, 1421-1445) が好例として挙げられる。細い柱とアーチが連続する繊細な様相が美しい同養育園のファサードでは、連続するアーチによりできた三角形の部分に正円のメダイオンが配置されている。そこでは水色の背景に子供の浮き彫りが施され、建築の概要を伝えている。

パリでは同図書館の他にメダイオンが採用されている事例としてはフェリックス・デュバン (Félix Duban, 1798-1870) のエコール・デ・ボザール校舎、パレ・デ・ゼテュード (Palais des Etudes, 1832-1838, 1863-1867) が挙げられる<sup>8</sup>。ラブルーストは同校舎の監督官 (inspecteur) を務め、アティック (attique) と呼ばれる屋根裏を兼ねた3階に相当する部分はラブルーストの設計である<sup>9</sup>。デュバンとラブルーストはボザール在学時代から生涯を通じた親友であった。その他にはシャルル・ガルニエ (Charles Garnier, 1825-1898) によるオペラ座 (Opéra, 1862-1875) が挙げられ、ここではヨハン＝ゼバスティアン・バッハ (Johann-Sebastian Bach, 1685-1750) などの著名な音楽家の浮き彫りが施されている。オペラ座はボザール校舎の30年後、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の24年後、パリ国立図書館の8年後に着工した建築であり、ここからはこの意匠が後のガルニエたちの世代にも継承された様子を理解することができる。古代ローマのメダイオンの意匠引用は18世紀の建築では稀であることから、19世紀に彼らが実際の建築で採用し、復権に貢献したと判断して良いであろう。メダイオンもアティックも古典的な意匠というよりは古代的な意匠であり、彼らは1830年代から古代の意匠を採用していた様子を理解することができる。ラブルーストたちが厳格な古典主義に対して幅広い表現を許容するロマン主義を確立したとする論評がしばしば見受けられるのであるが、こうした新鮮な古代の意匠引用はその好例であると言える。

メダイオンはサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館にも採用されており、正面ファサードのそれは新鮮なことに铸铁製である。ここでは同図書館の頭文字の「S」と「G」を組み合わせた飾り文字であり、黄金の施されたレリーフとなっていて、自然の光とともにその輝きは変化する。加えて、ここでは花綱飾りの彫刻装飾がメダイオンに掛かり、ファサードの装飾意匠の一部をなしている。さらにこのメダイオンは铸铁の横架材の端部に取り付けられた引き締め金物を兼ね、1階では梁が、2階ではアーチが引き抜かれる力に抵抗する役割を果たしている<sup>10</sup>。構造の実利性と芸術的意匠を同時に解いたラブルーストの独創性が光る秀逸なディテールであり、様々な論評で高く評価されている。

パリ国立図書館大閲覧室では本来外壁に設けられるメダイオンが室内にあり、天窓からの自然の光と大きな樹木の壁画の効果と共に外部空間を表しているかのようである。メダイオンは大閲覧室の石造のピリエ上方に設置され、それぞれに人物の横顔のレリーフが施されている。材料はプラスターであり、それに浮き彫りが施され、黄金部は金箔貼りと黄金塗装で仕上げられている。19世紀フランスのプラスターは大変堅固であり、石材にも近い強度があるとのことである<sup>11</sup>。黄金は日差しの強弱に従って、その輝きに変化があり、大

閲覧室の最深部で最も暗くなる箇所には黄金装飾が多く使われているのであるが、薄暗い最深部で柔らかく光る黄金は豪華であると同時に幻想的でもある。このプラスター白色下地と黄金縁取りの組み合わせは第二帝政様式を代表する室内装飾でもあり、第二帝政期の華やかさを伝えている。同図書館の建造時は第二帝政であり、厳密には帝立図書館であった。パリ国立図書館のメダイオンと構造との関連性はサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館のそれとは異なり、鉄構造の接合部やその覆いのなどの役割を果たしていない。なぜならパリ国立図書館の大閲覧室の鉄構造は完全に自立しており、鉄構造部は石造部に連結されていないからである。同国立図書館の石造部と鉄構造部には僅かな隙間があり、両者は接していない<sup>12</sup>。



図2：サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、正面ファサードの铸铁のメダイオン



図3：パリ国立図書館大閲覧室、メダイオン

### 3. 大閲覧室のメダイオンの詳細

メダイオンは大閲覧室内の下記の6のゾーンに配置され、各ゾーンに6個あり、合計36個ある<sup>13</sup>。

- 〈A〉：正面奥、左側円形壁面（奥に向って）。
- 〈B〉：正面奥、右側円形壁面（以下同様）。
- 〈C〉：中央、独立柱のピリエ。
- 〈D〉：左側壁面のピリエ。
- 〈E〉：右側壁面のピリエ。
- 〈F〉：後方壁面のピリエ。

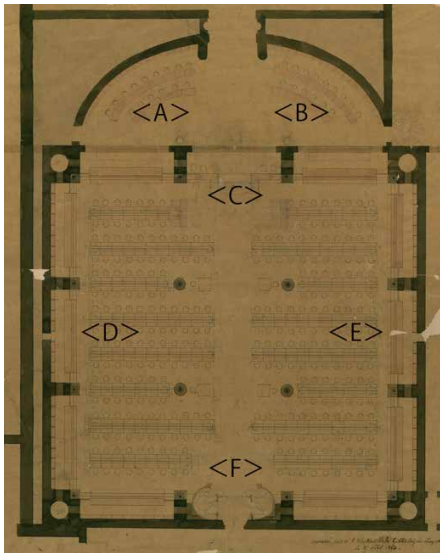


図4：大閲覧室の平面図とメダイオンが配置されているゾーン

### 3-1 〈A〉：正面奥左側円形壁面のメダイオン

ゾーン〈A〉では最深部、中央書庫室への入り口から左方へ向かって下記の人物のレリーフが配置されている。(整理番号、碑文の記載、人物の概略の順<sup>14</sup>)

- (1) CICERON, OUDINE sc. : マルクス・トゥッリウス・キケロ (Marcus Tullius Cicero, 前106-前43)、仏語ではシセロン (Cicéron)。共和政末期ローマの雄弁家、政治家、哲学者。ラテン散文の完成者。共和政末期の混乱期に教養と雄弁をもって不正を糾弾し、自由を擁護した。ルネサンス期ではペトラルカ、フランスではモンテスキュー、ヴォルテールの思想に大きな影響を与えた。共和主義と民主主義を象徴する人物である。主な著作、『弁論家論』、『国家論』、『ブルーツ』、『善と悪の限界について』など。
- (2) VIRGILE, OUDINE sc. : プーブリウス・ウェルギリウス・マーロー (Publius Vergilius Maro, 前70-前19)、古代ローマの叙事詩人。自然と信仰を謳歌し、ローマの世界支配の偉大さを明らかにした。主な著作、英雄叙事詩『アエネイス』など。
- (3) HORACE, OUDINE sc. : クイントゥス・ホラティウス・フラックス (Quintus Horatius Flaccus, 前65-前8)。仏語ではオラス (Horace)、古代ローマの詩人。主な著作、『風刺詩』、『書簡詩』など。ウェルギリウスと並び称されるローマ文学黄金期の詩人。
- (4) PLAUTE, OUDINE sc. : テイトゥス・マッキウス・プラウトゥス (Titus Maccius Plautus, 前254-前184)、仏語ではプロート (Plaute)、古代ローマの喜劇作家。ローマ的機知と力強い言葉に満ち、大衆に受けた。代表作『アンフィトルオ』、『ほら吹き軍人』など。
- (5) TACITE, OUDINE sc. : コルネリウス・タキトゥス (Cornelius Tacitus, 55-120)、仏語ではタチート (Tachite)。歴史家、政治家。主な著作『ゲルマニア』、『同時代史』など。
- (6) PLINE L'ANCIEN, OUDINE sc. : ガイウス・プリニウス・セクンドゥス (Gaius Plinius Secundus, 23-79)、古代ローマの博物学者、政治家、軍人。主な著作、百科全書『博物誌』(37巻)など。大プリニウスのこと。

最も上位となるこの場所では古代ローマの思想と文学、学問が主題であり、この場所に年譜的に先となる古代ギリシアが配置されなかったことは意外であった。ここでは古代ローマの共和政期と帝政期の思想家、詩人、劇作家、歴史家、博物学者が配置されている。最深部の中央書庫室への入り口に最も近い場所に配置されたのはキケロ (図5) であり、自由を重んじる共和主義と民主主義の象徴が最も高位の場所を飾った。このキケロの配置は古代ローマの思想がルネサンスを通じて18世紀フランスの啓蒙主義へと受け継がれ、民主主義の源流となっていることを我々に思い起こさせる。ウェルギリウスとホラティウス、タキトゥスとプリニウスからは古代ローマの文学、歴史学、博物学の学識の高さを再認識することができる。喜劇作家プラウトゥスの選択は個性的であり、ローマらしい朗らかさと、同時にコレージュ時代からユーモアのある風刺画を描いていたラブルーストの人柄が感じられる<sup>15</sup>。

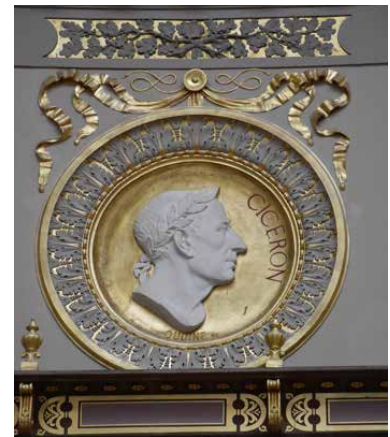


図5：キケロ、最深部中央書庫室への入り口左隣、〈A〉：正面奥左側円形壁面

### 3-2 〈B〉：正面奥右側円形壁面のメダイオン

ゾーン〈B〉では最深部、中央書庫室への入り口から右方へ向かって下記の人物のレリーフが配置されている。

- (7) HOMERE, OUDINE sc. : ホメロス (Hómēros, 前8世紀頃)、仏語ではホメール (Homère)。古代ギリシアの叙事詩人。叙事詩『イリアス』、『オデュッセイア』の作者。
- (8) ESCHYLE, OUDINE sc. : アISKYLOS (Aischylos, 前525-前456)、仏語ではエシール (Eschyle)。古代アテナイの三大悲劇詩人の一人。アッティカ悲劇の形式を確立。代表作『縛られたプロメテウス』、『アガメムノン』。
- (9) ARISTOTE, OUDINE sc. : アリストテレス (Aristotélēs, 前384前322)、古代ギリシアの哲学者。政治、文学、倫理学、論理学、博物学、物理学、あらゆる学問領域を対象に分類と総括を行った。プラトンの弟子。
- (10) DEMOSTHENES, OUDINE sc. : デモステネス (Dēmōsthénēs, 前384/383-前322)、古代ギリシア最大の雄弁家、政治家。政治演説『フィリッポス弾劾・第1～第3』(Philippika) が著名。マケドニア王フィリッポス2世のギリシアに介入に対し、デモステネスはフィリッポスを激しく弾劾した。愛国者として反マケドニア運動を行い、ギリシアの諸ポリスの自治を守ろうとした。後に追求を受け、服毒自殺した。
- (11) PLATON, OUDINE sc. : プラトン (Plátōn, 前427-前347)、アテネの哲学者。ソクラテスと交友があり、ソク

ラテスの不条理な死と当時の政治情勢に対する失望から哲学の道に入った。著作のほとんどはソクラテスを中心とする対話集。アテネにアカデメイアを創設し、真に理想国家の統治者たる人材の養成をはかった。

- (12) HERODOTE, OUDINE sc.: ヘロドトス (Héródotos, 前 485-前 420)、古代ギリシアの歴史家。ペルシア戦争を主題とする『歴史』(9巻)はギリシア散文史上最初の傑作。過去の出来事を詩歌ではなく、実証的学問の対象とした最初のギリシア人。

次に上位となるこの場所では古代ギリシアの叙事詩人、哲学者、博学の人物、雄弁家、歴史家の知識人たちが配置され、ギリシア世界の人文学が主題となっている。叙事詩人、悲劇詩人が哲学者より高位に置かれていることに特徴があり、最深部の中央書庫室への入り口に最も近い場所に配されたのはホメロス(図6)であった。歴史的な悲劇と神々の世界が交錯する『イリアス』、『オデュッセイア』を思い起こすと、大変共感の持てる配置である。ホメロス、アイスキュロス、デモステネスからはギリシア世界の悲劇性が表れ、アリストテレス、プラトンからは哲学を重んじる姿勢を読み取れる。しかしながらソクラテスは列せられていない。歴史家ヘロドトスはラブルーストラしい選択であり、彼は完璧な古典語(ラテン語と古代ギリシア語)を修得し<sup>16</sup>、1828年のパエストゥム神殿の研究の頃からパウサニアスの『ギリシア案内記』を参照し、古代ギリシアの都市や建築、人々の習慣について見識を深めていた<sup>17</sup>。

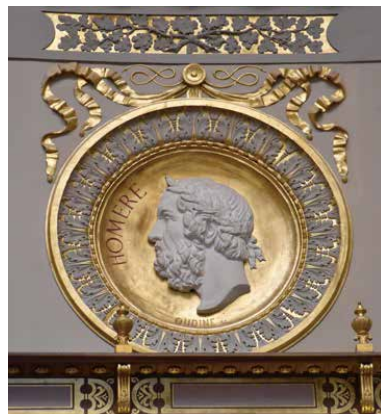


図6：ホメロス、最深部中央書庫室への入り口の右隣、〈B〉：正面奥右側円形壁面

### 3-3 〈C〉：独立柱ピリエのメダイヨン

ゾーン〈C〉では正面に向かって左から右へ下記の人物のレリーフが配置されている。

- (13) S<sup>T</sup>-AUGUSTIN, 354-430, H. SOBRE sc.: アウグスティヌス (Augustinus)<sup>18</sup>、仏語ではサン＝トーギュスタン (Saint-Augustin)。神学者、守護聖人。初期西方キリスト教会の教父、教会博士、北アフリカで活動した。新約聖書とプラトンのギリシア思想との融合を試み、自由意志論では個人の自由を認めた。著書『神の国』は西洋初の歴史哲学書。
- (14) S<sup>T</sup>-THOMAS D'AQUIN, 1227-1274, H. SOBRE sc.: トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, 1225-1274)、聖人、イタリアのドミニコ会士、神学者、教会博士、パリ大学教授 (1252)。キリスト教思想とアリストテレスを中心とする哲学を統合し、体系的に説明した。代表著書『神学大全』。その他に聖書やアリストテレスの注

解に関する著作を残した。

- (15) PASCAL, 1623-1662, H. SOBRE sc.: ブレーズ・パスカル (Blaise Pascal)、フランスの哲学者、数学者、物理学者、思想家、キリスト教神学者。「パスカルの原理」、遺稿集『パンセ』が著名。
- (16) BOSSUET, 1627-1704, H. SOBRE sc.: ジャック＝ベニーニュ・ボシュエ (Jacques-Bénigne Bossuet)、フランスのカトリック司教、聖職者。王権神授説を提唱し、絶対王政を支持した。ルイ14世の宮廷説教師を務めた。
- (17) VOLTAIRE, 1694-1778, LAVIGNE sc.: ヴォルテール (Voltaire)、哲学者、文学者。18世紀フランス啓蒙主義、百科全書派を代表する思想家。
- (18) MONTESQUIEU, 1689-1755, H. SOBRE sc.: シャルル＝ルイ・ド・モンテスキュー (Charles-Louis de Montesquieu)、フランスの啓蒙思想家、法律家、歴史家。代表著書『法の精神』。

このゾーンでは4世紀初期キリスト教時代のアウグスティヌス、中世13世紀のトマス・アクィナスなどのギリシア哲学とキリスト教の融合、神学者による哲学を源流とする系譜が主題であることが理解できる。ルイ14世の絶対王政を支持したボシュエの選択は個人的であるとともに、この時代がフランス王朝の最盛期を築いたことを我々に思い起こさせる。一方、ルイ14世の実質的な宰相であったジュール・マザラン (Jules Mazarin, 1602-1661) やジャン・バティスト・コルベール (Jean-Baptiste Colbert, 1619-1683) は列せられていないのである。マザランは愛書家で知られ、その蔵書はパリ国立図書館の大きな礎となった。コルベールは宰相時代に蔵書の収集に尽力し、両者は国立図書館の発展に貢献した人物であった。さらに驚くべきことに、パリ国立図書館の最も大きな礎を築いたリシュリユー枢機卿 (Armand Jean du Plessis, cardinal et duc de Richelieu, 1585-1642) も列せられていないのである。パリ国立図書館の起源はリシュリユーの蔵書であり、彼の居館と蔵書がマザランを経て後に国立図書館となった<sup>19</sup>。これらを勘案すると、彼らの不在は大変示唆的である。

さらに17世紀フランスの天才パスカル(図7)、18世紀の啓蒙思想家ヴォルテール、モンテスキューと続き、フランスの啓蒙思想が讃えられていると言える。概してこのゾーンではギリシア哲学とキリスト教の融合に端を発し、17世紀の絶対王政時代の最盛期を経て、18世紀の啓蒙主義に至るフランスの人文学の栄光の系譜が主題であると結論付けることができる。



図7：パスカル、〈C〉：中央独立柱のピリエ

### 3-4 〈D〉：左側壁面のピリエのメダイヨン

ゾーン〈D〉では奥から後方へ向かって下記の人物のレリーフが配置されている。

- (19) MONTAIGNE, 1533-1592, LAVIGNE sc.: ミシェル・エケム・ド・モンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne)、フランスの思想家、モラリストの始祖。代表著書『エッセー (随筆録)』。モラリストは人間性と道徳性を主題とするフランスの特有の文人の系譜であり、パスカル、ラ・ロシュフーコーなどが挙げられる<sup>20</sup>。
- (20) NEWTON, 1642-1727, LAVIGNE sc.: アイザック・ニュートン (Isaac Newton)、イギリスの物理学者、天文学者、数学者。万有引力の原理の発見、微積分法の発明、光のスペクトルの分析を行った。
- (21) BACON, 1214-1294, LAVIGNE sc.: ロジャー・ベーコン (Roger Bacon)、13世紀イギリスの哲学者、自然科学者。驚異的博士と呼ばれ、経験的方法や実験的方法を導入し、近代科学の先駆者として評価される。哲学を神学から区別した。主著『大著作』では自然科学、哲学、言語に関する論文を収録。
- (22) DESCARTES, 1596-1650, LAVIGNE sc.: ルネ・デカルト (René Descartes)、フランスの哲学者、数学者、自然科学者。合理主義哲学の祖。近代科学の理論的枠組みを確立した。不合理に対する批判検討を「理性」として解放した。ガリレオの宗教裁判の有罪を受けて、地動説『宇宙論』の公刊を断念。主な著作は『方法序説』、『屈折学』、『気象学』、『幾何学』、『省察録』、『哲学原理』など。
- (23) GOETHE, 1742-1832, LAVIGNE sc.: ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)、ドイツの詩人、劇作家、自然科学者。調和と普遍的人間性に基づくドイツ古典主義文学を確立した。後のロマン主義に大きな影響を与えた。代表作、小説『若きウェルテルの悩み』、詩劇『ファウスト』。
- (24) LA FONTAINE, 1621-1695, CH. JANSON sc.: ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ (Jean de la Fontaine)、17世紀フランスの詩人。モリエール、ラシーヌと親交を結び、彼らとともにルイ14世統治下のフランス古典主義文学の黄金時代を築いた。動物を主人公として当時の社会を風刺した『寓話詩』で知られる。



図8：デカルト、〈D〉：左側壁面

このゾーンでは主にニュートン、デカルト (図8) などの16、17世紀の自然科学者、思想家、哲学者が挙げられ、近代の自然科学と思想の礎が主題となっている。モンテーニュにはフランス特有の人間性を重んじるモラリストの精

神が象徴され、ゲーテはロマン主義へ貢献したという観点からラブルーストとの共通性が認められる。ベーコンの選択には科学の源流を見つめる姿勢が見られ、新鮮な選択としてラ・フォンテーヌが挙げられる。前述のプラウトゥスと同様に彼のユーモアや社会風刺を好む傾向を再び確認することができた<sup>21</sup>。総じてこのゾーンでは、ヨーロッパ全体の近代の思想、哲学、自然科学が主題であり、同時にフランス的思考の個性が示されていることに特徴がある。

### 3-5 〈E〉：右側壁面のピリエのメダイヨン

ゾーン〈E〉では奥から後方へ向かって下記の人物のレリーフが配置されている。

- (25) DANTE, 1265-1321, CH. JANSON sc.: ダンテ・アリギエーリ (Dante Alighieri)、イタリアの詩人。代表作、長編叙事詩『神曲』は中世文明の集大成であるとともにルネサンスの先駆をなし、世界文学の巨峰として他に隔絶した地位を占める。
- (26) MILTON, 1608-1674, CH. JANSON sc.: ジョン・ミルトン (John Milton)、イギリスの詩人。言論の自由を論じ、共和政府のラテン語秘書として活躍した。代表作、長編叙事詩『失樂園』はダンテの『神曲』と並ぶルネサンス期の名作である。
- (27) TASSE, 1544-1595, CH. JANSON sc.: トルクァート・タッソ (Torquato Tasso)、16世紀のイタリアの詩人。仏語通称はル・タース (Le Tasse)。代表作、叙事詩『エルサレム解放』。
- (28) PETRARQUE, 1304-1374, CH. JANSON sc.: フランチェスコ・ペトラルカ (Francesco Petrarca)、イタリアの詩人。代表作、叙事詩『アフリカ』、『秘密』、『孤独な生活について』。
- (29) MOLIERE, 1622-1673, OUDINE sc.: モリエール (Molière)。コルネイユ、ラシーヌと並ぶフランス古典劇三大作家の一人。代表作品、『タルチェフ』、『人間嫌い』、『守銭奴』他。風刺の効いた性格喜劇、風俗喜劇を完成させ、人間性に深く触れた本格喜劇を生み出した<sup>22</sup>。
- (30) M<sup>ES</sup>-DE SEVIGNE, 1626-1696, CH. JANSON sc.: セヴィニエ侯爵夫人、マリー・ド・ラビュタン＝シャンタル (Marie de Rabutin-Chantal, marquise de Sévigné)、フランスの貴族女性。愛娘へ宛てて書き送った書簡が著名。機知に富み、当時の時代風景を鮮やかに綴っている。



図9：ダンテ、〈E〉：右側壁面

このゾーンではダンテ（図9）から始まりイタリア、フランス、イギリスのルネサンス期の偉大な叙事詩の巨匠と近世の文学作家が配され、世界の本質を問う作品を残した作家や、社会を動かし、人間性に深く触れた人物が挙げられている。冒頭にダンテが列せられていることに共感が持て、セヴィニエ夫人の選択は新鮮である。同夫人は大閲覧室の全メダイオンの中で唯一の女性であり、ラブルーストが同夫人を価値を見出していた様子を理解することができる。彼女の書簡集は17世紀後半のフランスの宮廷生活、文化や社会を知る資料として多くの人々に読まれ、現在も英語、日本語に翻訳され、17世紀のフランスを知る記録資料として信頼されている。概してこのゾーンではイタリア・ルネサンスの文学がヨーロッパ各国に広がり、各国が豊かな独自の文学が開花させた様子が表されている。

### 3-6 〈F〉：後方壁面のピリエのメダイオン

ゾーン〈F〉では後方に向かって右から左へ下記の人物のレリーフが配置されている。

- (31) SHAKSPEARE, 1563-1615, GRUYERE sc. : ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare)、イギリス・ルネサンスを代表する劇作家。代表作は『ハムレット』、『マクベス』、『オセロ』、『リア王』など。生と死、善と悪、罪と罰、仮象と真実など、人間の根本的問題をテーマとした。
- (32) MACHIAVEL, 1469-1527, H. SOBRE sc. : ニッコロ・マキャヴェッリ (Niccolò Machiavelli)、イタリアの政治家、政治思想家、フィレンツェ共和政府書記官。主著『主君論』。権力政治に対する冷徹なリアリズムにより、近代的政治認識の誕生に決定的な役割を果たした。
- (33) CORNEILLE, 1606-1684, GRUYERE sc. : ピエール・コルネイユ (Pierre Corneille)、17世紀フランスの劇作家。古典主義の劇作家、ラシーヌとモリエールと並び称される。『ル・シッド』は不朽の名作。英雄主義的な劇に愛国心、名誉、信仰、献身などの高潔な精神を盛り込み、理想の人間を描いて意志力を賛美した。
- (34) RACHINE, 1639-1699, GRUYERE sc. : ジャン＝バティスト・ラシーヌ (Jean-Baptiste Racine)、フランスの劇作家。コルネイユ、モリエールと並ぶ古典主義演劇の巨匠。代表作は『アンドロマック』、『フェールド』など。
- (35) BOCCACE, 1313-1375, GRUYERE sc. : ジョヴァンニ・ボッカッチョ (Giovanni Boccaccio)、イタリアの小説家、詩人。物語『デカメロン』はユーモアや艶笑に満ちた悲喜劇であり、14世紀イタリア社会を写し出した。最も早いダンテの理解者。
- (36) CERVANTES, 1547-1616, GRUYERE sc. : ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ (Miguel de Cervantes Saavedra)、16世紀スペインの作家。代表作品『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』。

後面の壁面、最後のゾーンではイギリス、フランス、イタリア、スペインのヨーロッパ各国のルネサンス期の演劇作家、不朽の名作の著者が並び、著作の主題は悲喜劇の英雄伝の傾向が見られる。フランスの劇作家の選択には古典主義の傾向があるが、モリエールは〈E〉ゾーン、別の枠組に配置されている。興味深い人物はマキャヴェリであり、

このゾーンで文学作家ではないのは彼のみである。前述のようにルイ13世、14世の宰相たちは不在であり、全体を通じて政治家で配置されているのはマキャヴェッリ（図10）のみであり、実に示唆的である。総じてこのゾーンの主題はヨーロッパのルネサンス期の文学に見られる英雄の悲喜劇と現実性と解釈され、これによりパリ国立図書館大閲覧室の36に及ぶ一連のレリーフの最期が締め括られた。



図10：マキャヴェッリ、  
〈F〉：後方側壁面

### 4. レリーフの制作者

「sc.」は彫刻家 (sculpteur) の略記であり、メダイオンのレリーフの制作者はウーディネ (Oudiné)、ソブル (H. Sobre)、ラヴィーニュ (Lavigne)、ジャンソン (Ch. Janson)、グリユイエール (Gruyère) の5名である。ウーディネは金属作家ウジェヌ＝アンドレ・ウーディネ (Eugène-André Oudiné, 1810-1887) であると判断される。調べたところ、ウーディネはラブルーストより少し若い世代のメダル製造の金属作家であり、フランスの様々な硬貨やメダルを制作した人物である。ウーディネは1831年にメダルと貴石の彫刻部門のローマ大賞を受賞し、1857年レジオン・ドヌール勲章、シュヴァリエ階級を受勲している。現在でも博物館や資料館に彼が制作したメダルが収蔵されている。また、ラブルーストが意匠を担当し、1847年に制作された中央建築家協会 (Société centrale des architectes) 会員メダル (図11) を確認したところ、ウーディネは共同制作者であることが判明した。これは新しい発見であった。このメダルの表面には「H・LABROUSTE・ARCH・」、 「E・A・OUDINE・SCULP・」と彫刻され、両者の共同制作であったことを確認することができた。ホメロスなど同図書館のメダイオンのレリーフと中央建築家協会のメダルの女神のレリーフを見比べると同一作家の制作と思われる類似性が認められる。中央建築家協会のメダルはラブルーストに関する様々な文献で取り上げられているが、ウーディネとの共同制作であったことについては言及されていない。このメダルの表面には「様々な時代の建造物の冠を戴いた女神の横顔」、裏面には「コンパスと花」が彫刻され、前者は「全ての時代の建造物が女神の頭脳から湧き出ること」を示し、後者はラブルーストの生涯の建築理念である「科学と芸術」、「自由と正確性」を表している<sup>23</sup>。ウーディネは、ラブルーストから生涯の建築理念の彫刻とパリ国立図書館の最も重要なゾーン、正面奥の壁面の古代ローマと古代ギリシアの偉人たちのレリーフの彫刻を依頼された人物であるということになる。

ラヴィーニュはユベール・ラヴィーニュ (Hubert Lavigne,

1818-1882)であると思われる。ラヴィーニュは1843年のローマ大賞コンクール2等賞(第3位)入賞者であり、彼はルーヴル宮殿ファサードの彫刻の一部を担った彫刻家である。ジャンソンはルイ＝シャルル・ジャンソン(Louis-Charles Janson, 1823-1881)であると思われ、ジャンソンはガルニエのオペラ座と、ラヴィーニュと同様にルーヴル宮殿のファサードの彫刻を担った彫刻家である。グリユイエールはテオドール＝シャルル・グリユイエール(Théodore-Charles Gruyère, 1813-1885)であると思われ、彼は1839年にローマ大賞彫刻部門で優勝した彫刻家であり、同じくルーヴル宮殿ファサードの彫刻を担った彫刻家である。



図 11: アンリ・ラブルースト、アンドレ・ウーディネ、中央建築家協会会員メダル

## 5. まとめ

全体を振り返ると正面奥の円形壁面、ゾーン〈A〉、〈B〉では古代ローマと古代ギリシアの雄弁、文学、歴史が讃えられ、中央独立柱のゾーン〈C〉ではギリシア哲学との融合を試みながら、それを継承した初期キリスト教時代から18世紀フランスの啓蒙主義に至る思想哲学が讃えられている。正面に向かって左右の壁面、〈D〉、〈E〉のゾーンではルネサンス期が主題であり、左ではその哲学、思想、自然科学、右では文学が讃えられている。後方の壁面、ゾーン〈F〉では、ルネサンス期の英雄の文学と政治論が讃えられている。時折、ラブルーストの個性が感じられる選定があったことも新鮮な発見であった。

さらにこの研究ではレリーフを制作した作家達を特定できたことにも成果があった。ウーディネが同図書館のローマとギリシアを表現する主要なゾーンのメダイヨンのレリーフと、ラブルーストの生涯の建築理念を表した中央建築家協会のメダルの制作者であったことは大きな発見であった。ラブルーストのウーディネの力量に寄せた信頼が厚いものであった様子を伺い知ることができた。大閲覧室のレリーフは5名の作家達により制作され、それぞれがローマ大賞を受賞、入賞し、ルーヴル宮殿の彫刻を担う優秀な彫刻家達であったことは、大閲覧室の芸術表現を高め、同図書館の価値を高めようとする意志や情熱が感じられた。一方、ジャンソンが同図書館とガルニエのオペラ座のメダイヨンのレリーフを制作していたことも新しい発見であり、類似性を指摘した両建築のメダイオン装飾について、同一の彫刻家によるものであることが明らかになった。これによりラブルーストの世代からガルニエ世代への装飾意匠の継承をさらに明らかにすることができた。

本稿で述べた諸点を考慮に入れるならば、パリ国立図書館大閲覧室の一連のメダイオンは、フランスを中心にヨーロッパにおけるギリシア、ローマの古代を端緒とする、18

世紀の啓蒙主義に至るまでの人文学の叡智の系譜とその栄光を讃え、表していると結論付けることができる。この表現はパリ国立図書館に相応しい格調の高さを表すことに成功し、同時にラブルーストの哲学、思想、文学、自然科学への見識の深さをも示していた。パリ国立図書館大閲覧室の全体に対するメダイヨンの意匠的役割について言及するのであれば、天窓からの自然光の差す大空間の中で閲覧者は学究に向き合い、壁面とピリエの上方から古代、初期キリスト教、ルネサンス、啓蒙主義の各時代の文学、自然科学の偉人たちが守護神のように閲覧者達を見守るという構成であると解釈することができる。さらに、黄金が施されたメダイオンは鉄構造の軽やかな9個のクーポールから差す自然の光に照らされて、時間と共にその反射が変化する。鉄構造の技術に支えられた大空間の中で人文学の叡智が芸術意匠として表現されていることは、彼の生涯の理念「科学と芸術」と一致している。

一方、中央書庫室の入り口への意識の集中について言及すべきであろう。大閲覧室は9個の正方形が基本的な幾何学であり、均質性を持つ空間であるが、唯一の軸線は中央軸である。その焦点には門とも言える中央書庫室へ入り口があり、その奥はもう一つのラブルーストの才覚を示した中央書庫室へと続いている。その空間は天窓から自然の光が差し、その門の両脇には女神のカリアティード(女像柱)が配され、さらにその左右には黄金の光を放ちながらキケロとホメロスが控え、古代ローマと古代ギリシアの人文学の偉人たちが列し(図1)、神殿の入り口とも言える神々しさを有している。知の殿堂の門に相応しい崇高性を表すことに成功している。

一般的にラブルーストは鉄構造を露出で採用し、鉄構造の新たな展開に貢献した建築家という技術的な観点から論じられる。しかしながら、彼は芸術表現においても若い頃から優れた力量を持ち<sup>24</sup>、代表作品の二つの図書館では19世紀フランスのロマン主義の建築を牽引し、建築の芸術表現においても優秀性を発揮した建築家でもある<sup>25</sup>。今回のメダイヨンの分析では彼の芸術的素養の高さと学識の深さの一端を明らかにすることができた。大閲覧室の装飾芸術ではこのメダイヨンの他に前述の自然の樹木を描いた壁面や大書庫室の入り口に配置されたカリアティード(女像柱)などがあるが、これらについては別の機会にて論じたい。

## 謝辞

本研究はJSPS科学研究費補助金(科研費)の助成を受けたものである。基盤研究(C)、17K06749、『パリ国立図書館における分離構造と細い独立柱の空間の源流』。This research was supported by JSPS KAKENHI, Grant Number 17K06749, Grant-in-Aid for Scientific Research (C). 2017年8月と2018年8月に行った現地調査、研究活動では、建築家のブリューノ・ゴードン(Bruno Gaudin)氏とヴィルジニー・ブレガル(Virginie Brégal)氏、修復建築家のジャン＝フランソワ・ラノー(Jean-François Lagneau)氏とパトリス・ジラルド(Patrice Girard)氏をはじめに、フランス国立図書館、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の方々、パリ国際大学都市スイス館の方々から多くの支援と協力を賜りました。心から感謝とお礼を申し上げます。

## 参考文献

ラブルースト関連 : Saddy, Pierre., *Henri Labrousse. Architecte, 1801-1875*, Caisse Nationale des Monuments Historiques et des Sites, Paris, 1977. Drexler, Arthur (ed.), *The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts*, The Museum of Modern Art, New York, M.I.T. Press, Cambridge, Massachusetts, 1977. Middleton, Robin (ed.), *The Beaux-Arts and nineteenth-century French architecture*, Thames and Hudson, London, 1982. Zanten, David Van, *Designing Paris : Architecture of Duban, Labrousse, Duc and Vaudoyer*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts London, 1987. Leniaud, Jean-Michel (dir.) , *Des palais pour les livres, Labrousse, Sainte-Geneviève et les bibliothèques*, Maisonneuve & Larose, Paris, 2002. Coll., Dubbini, Renzo (cura), *Henri Labrousse 1801-1875*, Electa, Milano, 2002. Coll., Bélier. Corinne, Barry Bergdoll, Marc le Cœur, *Labrousse (1801-1875), architecte : La structure mise en lumière*, Cité de l'architecture et du Patrimoine, The Museum of Modern Art, Bibliothèque nationale de France, Nicolas Chaudun, Paris, 2013. ピエール・サディ、『建築家、アンリ・ラブルースト』、1977、丹羽和彦翻訳、福田晴虔編集、翻訳脚注協力白鳥洋子、中央公論美術出版、2014。19世紀フランスの建築：三宅理一、『ボザール：その栄光と歴史』、鹿島出版会、東京、1982。ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・19世紀建築 2』、図説世界建築史 14、土居義岳訳、本の友社、2002。フランス国立図書館関連 : Blasselle, Bruno., *La Bibliothèque nationale*, Presses Universitaires de France, Paris, 1989, 1993. Blasselle, Bruno., Jacqueline Melet-Sanson, *La Bibliothèque nationale de France, Mémoire de l'avenir*, Découvertes Gallimard Histoire, Paris, 1990, 2006. Conraux, Aurélien., Anne-Sophie Haquin et Christine Mengin (dir.), *Richelieu, Quatre siècles d'histoire architecturale au cœur de Paris*, Bibliothèque nationale de France, Institut national d'histoire de l'art, Paris, 2017. アンドレ・マソン、ポール・サルヴァン、『図書館』、小林宏訳、文庫クセジュ、白水社、1969年。

図版出典 : 図4、図11 : BNF。写真は筆者撮影。

- <sup>1</sup> パリ国立図書館の用語に関して、ラブルーストの設計による国立図書館は長年に渉り国立図書館 (Bibliothèque nationale) またはパリ国立図書館 (Bibliothèque nationale de Paris) と呼ばれた。現在のフランスの国立図書館の名称はフランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France) である。本稿では建造時の19世紀から近年の再編成に至るまで長年に渉り習慣的に使われていた呼び名を踏襲し、パリ国立図書館とする。
- <sup>2</sup> フランス国立図書館の再編成と改修計画の概要は白鳥 (2018), p.13 に記載した。アンリ・ラブルーストとパリ国立図書館に関する筆者の論文：「アンリ・ラブルーストの青年期と師匠たち：18世紀の革新性の継承」、名古屋造形大学紀要、第18号、pp. 59-74、2012年。「アンリ・ラブルーストに関する建築史的研究：パエストゥムの神殿の復元と論争に見ら

れる分離構造の源流」、博士論文東京大学大学院工学研究科博士課程、2015年。「アンリ・ラブルーストのエコール・デ・ボザール時代：コンクール・デ・ミュレーションにおける18世紀の啓蒙性と近代建築の予兆」、長岡造形大学研究紀要、第14号、pp.6-16、2017年。「フランス国立図書館の端緒：シテ宮サント＝シャペルの宝物庫と19世紀の建築」、長岡造形大学研究紀要、第15号、pp.13-21、2018年。

- <sup>3</sup> 白鳥 (2015), pp.111-127 に詳細を記載した。
- <sup>4</sup> サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の装飾芸術に関しては、Saddy (1977), Dubbini (2002), *La structure* (2013) などで論じられている。
- <sup>5</sup> Levine., Neil, "Speaking Architecture and Readable Architecture : The Néo-Grec at Ecole des Beaux-Arts", Drexler (ed. 1977), pp.393-416.
- <sup>6</sup> 建築用語解説は主に『建築大辞典』、第2版、彰国社、1993を参照した。通常のメダルは仏語ではメダイユ (médaillon) である。
- <sup>7</sup> 現代フランス語では弾薬の薬莖やインクのカートリッジなどがカルトウシュである。フランスの古代エジプトの再発見に関する参考文献 : Vercoutter, Jean., *À la recherche de l'Égypte oubliée*, Gallimard, Paris, 1998.
- <sup>8</sup> 現地確認。
- <sup>9</sup> Saddy (1977), p.5. 白鳥 (2015), p.68.
- <sup>10</sup> サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の鉄構造と石造部の接合部としてのメダイユの役割については詳細を白鳥 (2015), pp.125-126 に記載した。
- <sup>11</sup> Entretien avec M. Lagneau et M. Girard (2017).
- <sup>12</sup> ibid. 白鳥 (2015), pp.114-120. 現地確認。
- <sup>13</sup> <A>～<F>、(1)～(36) の記号番付は筆者による。
- <sup>14</sup> 人物の概略は主に下記の事典を参照した。『ブリタニカ国際大百科事典』、2010。Encyclopédie Larousse en ligne, Encyclopædia Universalis, Éditions en ligne de l'École des chartes, data.bnf.fr, bibliothèque nationale de France.
- <sup>15</sup> コレージュ時代の風刺画については白鳥 (2012)、p.62 に記載した。
- <sup>16</sup> 白鳥 (2012), p.62.
- <sup>17</sup> 白鳥 (2015), p.52.
- <sup>18</sup> 人物の生没年はメダイユの記載と現在の見解が一致している場合は省略した。
- <sup>19</sup> Blasselle (1989), p.16.
- <sup>20</sup> フランス語のモラリスト (moraliste) の第一の意味は人間探求家であり、彼らは人間観察を短い箴言にまとめた。日本語の道徳や道徳者とはニュアンスが異なる。
- <sup>21</sup> 「全く真面目で勉強熱心な性格であり、同時にユーモアや朗らかさを持っていた」とする彼の性格については白鳥 (2012), p.62 に記載した。
- <sup>22</sup> 現パレ・ロワイヤル、旧パレ・カルディナルの劇場を拠点に活動した。同劇場はパリ国立図書館の近くに位置する。
- <sup>23</sup> 中央建築家協会会員メダルの意匠については、白鳥 (2012), p.61 に詳細を記載した。
- <sup>24</sup> ラブルーストのエコール・デ・ボザールでの古典的教育における優秀性については白鳥 (2017) に記載した。
- <sup>25</sup> 白鳥 (2015), p.141.